



興亞院技術部長

宮本武之輔博士

日支事變が進展して來て、長期建設となり、新東亞建設となり、戦争3年目の今日では戦争の重大性よりも、戦争と併行して政治・經濟、文化の大陸建設工作をする事が、一層重大となつて來た際に、我國民の前に現はれたのが興亞院であつた。

興亞院は内閣直屬の重要な時局的の一機關であり、其長官を始め幹部の大部分が陸軍々人に依つて固められてゐるのである。軍人を以て固められてゐる興亞院の四部制の中に技術部なるものがあり、其部長に何人になるかは斯界注目の關心事であつた。其所へ内務省土木局から宮本武之輔博士が拔擢されたのである。之は全くの適任である。斯界何人も之は適才適所と認めざるを得ないであらう。實のところ興亞院の技術部が何んな仕事をするのか、その目的さへはつきりと知らない人

々にすら、唯漠然とした時局常識を以て想像して見て、宮本博士が最適任と一致するに相違ないのである。而して興亞院は唯單に役人を列べる丈でなく眞劍に仕事をするのだなと感じたのである。

今年3月になつて興亞院は華北、蒙疆、華中、厦門の4ヶ所に連絡部を設け、支那に於ける政治、經濟、文化を司導する陣容を整へて來た。然し其連絡部長は何れも陸軍中將であり、部員も軍人で固められてゐるのであるから、大陸的にはドシマ々仕事が出来てあらう。其間にあつて技術部長が土木の宮本博士であり、土木を常識として然も土木に囚はれざる宮本博士が、大陸建設の科學的方針を具體化して行く事は、東洋文化の一轉機に際して我々も大なる喜を期待するものである。

唯四面軍人の中にあつては、宮本博士が技

術家として餘りに孤立した様で淋しさを感じるのであるが、然し宮本博士の背後には我國の技術家中堅團體が、社會的に大なる理解を以て支持してゐる事を認めねばならない。技術家には軍人程の強大な團結力はないが、日本の大使命を達成すべき責任觀念に於ては必ずしも軍人に劣るものではない。今日の我國の技術家團體の幹部なり、中堅會員は悉く此の覺悟を以て其日常に處してゐるのである。

興亞院に於ける技術部の孤立、それは決して孤立ではなく、既存の内務省や鐵道省等よりも、より以上に大なる技術家の團結支持力を有するのである。此點は舊來の役所よりも寧ろ仕事が仕易いのではなからうか。

宮本博士は官界に於ける土木技術官としては大なる異彩であつた。宮本博士の活動の最も顯著な一例としては、日本工人俱樂部の創立であつた、技術家冬眠時代の20年前に、青年宮本學士は内務省の一官吏であり乍ら多數の同志者を得て獻身的な努力を續けたのである。

最も其以前に直木倫太郎博士などが思想的に技術家覺醒の論陣を張つてゐられた、それが土木關係の間に大なる反響を與へた際であつたから、宮本學士一派の日本工人俱樂部に参加した會員5千餘名の中には、土木技術家が過半数を占めて、殆んど土木團體の觀を呈したのである。其後幾多の變遷はあつたが、會の活動が思はしくなく會員數も漸減となり一時は會の維持困難とさへなつた。今日でこ

そ有馬頼寧伯が會長となり、梶井剛博士が副會長として名稱も日本技術協會と改稱され、若手幹部も力を入れて來て會勢漸く進展して來たが、日本工人俱樂部創立以來の生みの親であり、育ての親である宮本博士としては感慨無量のものであらう。實際20年間一日の如く、身は官吏であり乍ら一切の名利を離れて會の爲に盡力せられた事は容易ならぬ精神である。

今や日本が有史以來の未曾有の大業を達成すべき時局に立ちて、東亞の大陸を指導し之と提携すべき前途洋々たる事業を以て興亞院が生れ、其技術部長として宮本博士が押されたのである。其所には從來の御役所と異り何等の先輩もない、何等の舊慣もない、總てが新しく、總てが創造である。技術部の人容も着々整備しつつあるから、今後に於て宮本博士に對する責任も益々重大なるものがある。我等は特に博士の健在を祈るものである。

因に宮本武之輔博士は愛媛縣の人で、大正6年東京帝大土木科を出で、内務省東京土木出張所に入り、利根川改修工事及び荒川改修工事に従事し、昭和2年新潟土木出張所に轉じ信濃川補修工事に従事し、同12年東京帝大工學部教授となり、同18年12月興亞院技術部長を拜命したものである。

其間宮本氏はドイツに留學し、歸朝後内務省土木試験所に於て鐵筋コンクリートに關する研究を進め、學位を得たる外、著書も多く特にコンクリート及河川に關するものは有名である。

世界の工業技術を簡易に譯註紹介する雑誌はブラクチャカル・エシテニヤリシグ、一冊二十錢、申込は工事畫報社へ